



陽気だより

№75

2013.6.15

●ホームページからも「陽気だより」
最新号・バックナンバーをご覧いただけます

<http://yotokusha.com/>

図書出版 養徳社 〒632-0016 天理市川原城町 388 TEL 0743 (62) 4503 / FAX 0743 (63) 8077

養徳社

検索

第8号 (昭和25年1号) から

『陽気』は、昭和24年4月の創刊、今年で64年を迎えます。過去の記事から、その歩みの一端を振り返っていきます。

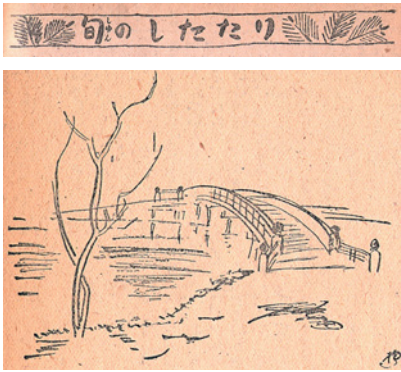
一 伝道師

一 柳さんのこと

山崎 潔

一柳^{いちろう}さんは明治三十八年、二十四歳で単身アメリカから日本に、布教伝道の目的で来られました。

言葉も習慣も全然知らない異国の地日本、しかも片田舎の江州八幡町に、八幡商業学校の一英語教師として来られたのです。クリスチャンの信仰に燃え、日本の土となつて果てる覚悟で来たものの、知人もなく、あまりにも違った風俗習慣、はては日露の戦いの最中ではあり、隣人からは変な目で見られる、そんな中でただ一人、黙々として教鞭をとっておられたのでした。



冬の寒い夜、暖房の設備もない日本の座敷で、ぼつねんとた

だ一人、遠く故国アメリカの父や母、さては友人のことなどを思い浮かべては、故国懐かしさに幾夜泣いたか知れなかつたと語られるボーリス一柳さんは、先日私にこんなことをしみじみ語られるのでした。

太平洋戦争の始まる少し前、アメリカに帰っておられたのですが、再び日本に帰ろうとされる時、もう既に日米戦争は開かれようとしていたのでした。友人達は、日本へ帰れば、君は必ず捕虜としてさんざん虐待されることはきまっているから、帰るのはやめたらどうだと注意してくれました。

その時、一柳さんは、いや僕は日本へ帰る。戦争が始まり、たとえ捕虜となろうとも日本へ帰ります。日本の人は君達の考えるような、徳義のない野蛮な人では決してありません。日本の人は思いやりの深い人々で、実に道義の高い立派な人々ばかりですから、たとえ捕虜となろうとも、日本の捕虜なら喜んで

君達は本当の日本を知らないのです、そんな心配をしてくれるのです。日本へ来てごらん。たとえば旅館に泊まるにしても、日本の旅館は唐紙一枚の仕切りで、隣の部屋に誰が泊まっているようにも、何の不安も心配もなく、気安く泊まれるのですよ。どんな大切な物でも、鍵一つかけずについて、誰も物をなくした人もないのです。

その点、アメリカはどうですか。ホテルに泊まれば、必ず鍵を先ず第一に渡され、ちよつと外出するにもいちいち鍵をかけ、隣の部屋とは厳重に仕切られ、鍵一つが何よりの頼りではありませんか。そんな国とは日本は全然違いますよ。

と、日本人々の徳義の高ことをさんざんにほめて、一柳さんは再び日本に帰って来たのです。それなのに、戦争も終わつた今日、日本の姿はどうでしょう。厳重に鍵をかけておいても強盗には入られる、肌身離さず持っていたても、スラれるという有様ではありませんか。私は今度何年ぶりかでアメリカへ帰りますが、アメリカの友人に、今の日本のこの姿を、何と云って話そうかと、つくづく考えさせられますよと、しみじみ私に

語られたのでした。

私はこの言葉を聞きつつ、ただ恥ずかしくて何とも答える言葉すら知らず、脇の下から冷や汗の出る思いがしたのでした。

一柳さんは過去五十年間、ただ一筋に布教伝道のために、本国からの援助も受けず、ただ一人黙々として、イエス・キリストの御弟子としての尊い歩みを続けられ、今は社会事業の上にも布教の上にも立派な足跡を残され、江州八幡町民の尊敬の的であり、地方民の懐かしき我等が神父さんでいられます。年寄りからも小さい子供からも、道行く誰からも親しまれ、尊敬されていられます。

八幡町において、新制中学の校舎の問題で町当局者が非常に困っているのを聞いて、今迄の立派な御屋敷を学校の校舎に喜んで提供され、ご自分は小使いさんの住んでいた二間の小さなお部屋に、私達老夫婦にはちょうどよいかげんの家ですよと云って、毎日老いの身を伝道に捧げていられます。

私は何時も一柳さんのことを思つては、我が信心の足りなさに鞭うたれ、一柳さんに出会っては教えられることばかりです。
(一柳さんの健康を祈りつつ)



近ごろの信仰

記者 昔の信仰と今の信仰、ことに現在の若い人達の信仰態度について、お感じになつてることを聞かせてください。

柏原義則 現在の若い人の信仰を見てみると、戦後の無軌道な自由の行き詰まりを何とか打開せねばならないところへきて、神を求めているようです。人生の目標を天理教できめてみようという真剣な気持ちがあると思います。だから、この信仰をけつして安物あつかいはできない。昔は、修養科を出たら布教をして教会を作ろう、宗教家として身を立てようというのが目的だった。今日のは自分の煩悶を解決したいというので、志が違う。狭い国土に閉じ込められていて、人間があふれているのだから、ゴタゴタが多い。埃が多くなるから、掃除すべき用事が沢山で

きる。だから宗教はいよいよ大切になるのです。

徳島教区で教会の建築ができあがった。仏教の方はお寺が建たない。檀家への言い訳に「天理教はひどい。国民が生活に苦しんでいるのに、教会を建てた。これはいくら弁解しても、話が進まない。災害のあと、一番先に建つのは食堂、その次が花柳界、というのが通り相場だが、そのまま放っておいたのでは本当の意味での復興にならない。どうしても宗教が立ち上がらねばならないのです。教会ができると、それを機縁にして精神が立ち直る。だから混乱の時こそ、まず教会を急ぐのです。天下泰平になってからなら、もう必要ない。話がアベコベなんです。**堀越儀郎** 若い人というものは、昔から信仰が薄いもので、

本当は小さい時から、それを持たせるのがいいのですがね。信仰の自由というが、日本の場合には無信仰の自由ですよ。

先日、町で共同募金をやっている学生が、帰りの電車に乗るのに押し合つて席を奪い合っているのを見ましたよ。いや、人ごとじゃありません。助け一條の人々のあの天理駅の雑踏はどうでしょう。電車の中で、譲り合いの風景が見られますか。病い助けさえ出来ればいいと考える人があつたら、大間違い。お医者さまじゃあるまいし……。病人を助けるのは機縁であつて、それが最終目的じゃありません。そのあとが大事。あとの仕込みが大事なのですよ。電車の話にしたつて、もう少し宗教都市らしい倫理性が欲しいですね。**東井三代次** われわれも、もつと説き方の研究をする必要がありますね。青少年によく解るように、受け入れやすいように説く、布教技術の研究が大事ですね。

楽だ。やはり、小さい時から信仰に導くことがいいですね。だからキリスト教の国民の考えは、どこか違ったところがあります。

戦争中、例の「月火水木金」で愛国心を煽つて休日返上しましたが、当時アメリカでも日曜返上論が強くなったとき、カトリックの大僧正が「日曜日は精神を磨く日だ。日曜をなくすることは信仰を失うことだ。信仰を失つて、たとえ戦争に勝つても、何の幸福があるか」と檄を飛ばして、休日返上を中止したという有名な話があります。信仰が生活とどうしても離せないものになつていくのです。**東井三代次** マッカーサー元帥のメッセージなど、いつでも「神」という言葉が出てくる。日本の政治家の中で「神に誓つて……」などと、果たして誰が言いますか。国民の環境が宗教という点で、それだけ違うのです。

定期購読中

お道の家庭雑誌 陽気

◎定期購読の誌代(1冊) 半年分…1,600円(送料共) 1年分…3,200円(送料共) ※ゆうちょ銀行の青い振込用紙をご利用下さい。(口座番号 00990-3-17694 加入者 養徳社) 希望の号を指定の上、お客様の住所、氏名、電話番号を詳しくご記入をお願いします。

問合せ先: ☎ 0120-920-398 養徳社 業務部窓口

作品募集

第3回公募 養徳社エッセイ賞

募集テーマ「私はこのように学んだ」

1等賞金 10万円(1名) 佳作賞金 3万円(2名)

選者 出久根達郎(直木賞作家)

締切 8月31日(当日消印有効)

※詳細は『陽気』6月号をご覧ください。

【陽気担当者変更届け】陽気お取扱者ご担当者様のご変更の際、弊社ホームページよりファイルをダウンロードいただき、必要事項にご記入いただきファックス下されるか、メールでご連絡ください。折り返し弊社業務部からご連絡させていただきます。FAX…0743-63-8077(24時間 年中無休) 郵送…〒632-0016 奈良県天理市川原城町388 養徳社 業務部 メール…youtokusha-eigyoku@poem.ocn.ne.jp